

第 73 回 山口西田読書会 (2015 年 5 月 2 日)

前回 (2015 年 4 月 25 日) のプロトコル (来栖)

出席者：佐野、山口、尾崎、萬納寺、植田、深野、桑原、杉山、児玉、藤村、岡部、  
長谷川、橋本、田中、千葉、岡田、山本、来栖

テキスト：西田幾多郎『善の研究』第 2 編第 10 章「实在としての神」第 1 段落

注：「後記」は発表の後來栖が付加したもの。

1、まず植田氏のプロトコルについて議論された。

1-1、「至誠」という言葉を西田がテキストで使っているかという確認の質問が出て、佐野先生が該当箇所 (3-13-3、3-11-3 以下) を示された。

至誠のことを西田は「倫理学草案」において人格的要求、自己の力を盡す、神の命令、良心の声、神性的理性 (来栖補足：『善の研究』では自己の内面的必然性、天真の要求) などと呼んでいることも指摘された。理性に関してカントの道德論と結びつけられたが、(カントの動機説と異なり) 至誠とその結果は矛盾しない、もし矛盾するとすればそれは至誠ではないか目的を間違えているかである (と西田は考えている) と言われた。また至誠が道德、絵画、(宗教的) 修行に共通するものであることも付け加えられた。

1-2、次に芸術について議論された (西田は 3-11-4 において至誠あるいは道德上の人格の発現を画家のオリジナリティの具現を例にとって説明している)。

1-2-1、「自己」表現が芸術になるとはいかなることかが問題とされた。単なる個人が何かを表現しても芸術にはならぬと佐野先生が言われた。抽象画は何を抽象するのか、その中にも何か本質的なものは含まれているのではないか、という質問も出た。抽象画も芸術の一部であるという声が出た。芸術とは何か問題である、芸術は現実の事物をデフォルメせねばならぬ、(個人の) インスピレーションを事実と一致させねばならぬ、文学や音楽などの背後に至誠があり、それが宇宙と一致したときに芸術となる、と佐野先生が言われた。

1-2-2、ここで来栖が、西田は道德や宗教を説明する論拠として芸術 (画家や書家、詩人などの芸術的創作) を例として引き合いに出すことが多く、これらを芸術に還元しようとする印象を免れないという疑問を出した。西田が芸術の例を多く出すことは佐野先生も肯定され、テキストの該当箇所 (3-13-5=最終段落の画家ジョットーの例など) を示された。これに対し、道德であれ宗教であれ芸術であれ求めるものはすべて同じであり、西田

は芸術至上主義者ではないという声が挙がった。しかし「説明の方法からすれば」西田は芸術至上主義の立場に立っていると云わざるを得ないのではないかという主旨で来栖が反論した。それに対し、(通常人は)芸術家が悟っているとは「言わぬ」、墨跡(円相)を芸術だとは「言わぬ」、という反論が出た。数学は芸術である(ただしその逆は必ずしも真ならず)という声も出た(このときのこのコンテキストにおいてではなく読書会の終わりにではあるが、バッハの音楽は芸術ではなく宗教であり数学であるという声もあった)。

1-3、次に植田氏のプロトコルの「3 哲学的問い」について議論された。

1-3-1、「(つまり、西田先生は、人間が、主客の世界から逃れられず、主客未分の世界に達し、宇宙の真理と合一しても、)それは一時的なものであり、(また、偽我の世界に身を宿してしまう存在であると考えられていたのではないだろうか。)」という記述について、西田はそのような表現はしておらず、これは植田氏の解釈だと佐野先生が指摘された。この西田理解は正しいのかという問いを佐野先生が出され、実在の分化発展の西田の概念を植田氏なりに表現したものだという声があった。

1-3-2、客観はなく、主観だけだと言うと理解が不能になるという声が挙がり、それは西田の立場ではないと佐野先生が言われた。

1-3-3、苦悩や不浄はなぜ起こるか、という問いが出された。それに対し、人間は自覚を持つ以上、悪を免れられぬ、真の自己は善悪を越えている、ということを佐野先生が西田の「倫理学草案」に基づいて言われた。1904年から5年の「倫理学草案」の第一では悪の問題は出てこないが、第二では出てくるとのことである。

1-3-4、「(諸学問だけでは解明しきれない)複雑怪奇な存在である人間(…)」という植田氏の記載に対して、人間は大衆へとたびく単純な存在であるという声があった。これに対し、西田では「水を飲む」のは水を飲むために飲むのであり、「生きるために飲む」というのは後からつけられた説明である、なぜ喉が渇くのかはわからぬ、このように人間は不合理であり、複雑怪奇であると理解されている、と佐野先生が言われた。

(渴かねばならないのは生命ができたから、と答えてみても、なぜ生命ができたかは考えても分からぬ。このようにどこまでも説明がつかぬ。)

2、次いで『善の研究』第2編第10章「実在としての神」の第一段落に入った。

(要約) 宇宙には唯一の実在があるのみであり、これを見る見方の相違によっていわゆる自然と精神の区別が起こる。この唯一実在は一方では無限の対立衝突であり、他方では無

限の統一であり、独立自全の無限の活動である。この活動の根本が神である。

「自然を深く理解せばその根底において精神的統一を認めねばならず (…)」という記述について、例えば無機物の結晶(2-8-4)かという問いが出た。そうだがそれだけではなく、有機物(2-8-4)や芸術的な自然把握も含まれると佐野先生が言われた。

また「(…)宇宙にはただ一つの実在のみ存在するのである。」の「宇宙」をどう理解するか、日常的に理解されている意味で捉えてよいか問題とされた。

### 3、哲学的問い：「1-2-2」の芸術と道德・宗教との関係について

3-1、西田が芸術至上主義者ではないとする解釈は不可能ではない。その根拠としては「学者の新思想を得るのも、道德家の新動機を得るのも、美術家の新理想を得るのも、宗教家の新覚醒を得るのも凡てかかる統一の発現に基づくのである（故に凡て神秘的直覚に基づくのである）。」（1-4-3）という『善の研究』の記述が挙げられよう（ここではすべてが並列的に記述されている。

（後記：しかし西田の後期の哲学ではむしろ西田は宗教至上主義者である、『善の研究』においても「学問道德の本には宗教がなければならぬ、学問道德はこれに由りて成立するのである」（第一編最後の文）のように宗教がすべての根本であることをうかがわせる文章もある、ということを経験が指摘した。）

ただ私が言わんとしたのは、西田が道德・宗教(3-13-5)や真実在(2-3-3)、真の自然理解(2-8-4、2-8-5)の「説明」において芸術を例として引き合いに出すことが多いということであり、「説明のための方法論からすれば」西田は芸術至上主義者であるという理解は成り立たないとは言えないと思う。この点が反対者に理解されていなかったと思う。

しかし西田が単に説明に最も都合がよいから芸術を引き合いに出しているのか、それともそれを越えて芸術が道德や宗教よりも根本的であると考えているのかには解釈の余地があると思う。（これについては私はここで結論を出すことはできない。）

（後記：これに対して佐野先生が以下のように言われた。西田の説明の方法は純粹経験だけである、西田が芸術を引き合いに出すのは説明ではなく、事実である。これに対する私の考え：説明という言葉が佐野先生と違う意味で用いていた。これが不適切であるなら、根拠づけと言ってもよい。即ち西田は純粹経験論を根拠づける手段として芸術の例を持ち出すのである。）

（説明法の問題を外してもみても）西田が道德や宗教を芸術に還元しようとしている「印象を与える」ことは否定できないと思われるが、なぜこれが一方的に否定されねばならないのかが理解できない。（これはコミュニケーションの問題であり、付記を参照。）

（後記：芸術、道德、宗教の関係について、佐野先生が以下のように言われた。『善の研究』

には二つの考え方がある。まず、「宗教道徳美術の極意」（第三篇の最後の段落）という言葉に見られるように、並列的にとらえる仕方。第二に、学問道徳の後に宗教がある（第四編）という考え方。後者の例として、「(…) 学問道徳の極致はまた宗教に入らねばならない（第四編第一章第五段落）」という記述、(4-1-5=最終段落)、「序」で哲学の終結として宗教を西田が挙げていることを示された。）

3-2、また、日常で芸術家が悟っていると「言わぬ」、墨跡（円相）が芸術だとは「言わぬ」、というのは哲学的というより社会学的な論拠であり、これに基づいて西田が芸術至上主義者でないと結論づけるのは不可能と思われる。この論拠からすれば「意識現象が唯一の実在である」と通常は誰も「言わない」から西田は間違っていると結論づけられるはずだが、果たしてそうであろうか。西田からすれば日常の言語使用法が「疑うにもはや疑いようのない、直接の知識」（2-1-2）として哲学の出立点たりうるであろうか。

（後記：これに対する反論となりうるものが議論された。すなわち、『善の研究』第二編第一章第二段落の注における、バークリー流の観念論的議論が、実は物心の独立的存在という日常的存在把握を前提にしてこれを論駁することを通して西田が純粹経験の概念を根拠づけている、即ち物心の独立的存在とは、これに基づいて他のすべての認識が可能となる（現象学でいう）原的信憑 *Urdoxa* であり、この方が純粹経験よりも根本的に疑うにもはや疑いえない直接の知識である、ということである。）

3-3、芸術、宗教、道徳の求めるものがすべて同じであればそれは何か。（後記：神人合一、真の自己を知る、無我の境、と佐野先生が答えられた。第三篇の最終段落を参照。）

それらの持つ価値がそこに現れている精神性で一樣に判定されるのであれば、それら相互の区別はいかにして生じるのであろうか。（西田自身がこれらを同一視しているとは言えないが、善が即ち美であるとは述べている（3-9-5））。

（後記：深野住職が一昨年挙げられた例で言えば、命を懸けてヴァイオリンを弾けば技術的に低いレベルでも宗教であり、逆に技術的に高い演奏であっても命を懸けていなければ単なる芸術であって宗教ではない、と言えるかと来栖が問い、深野住職が肯定された。宗教で何を理解するかが問題だと佐野先生が言われた。）

宗教心（自己の無力感「我々の自己が相対的であることを覚知し…」や煩悶に根差す宗教的要求）がなければ宗教ではなく、ここが学問や芸術と違うところである、『善の研究』以前では、理想を追うことを諦めねばならなくなった時、突如として見神の事実が生じることが「宗教がもとだ」と言われるときに考えられていることを佐野先生が述べられた。すなわち学問・芸術・道徳は行き詰まるのである。もともと人間は無限であるにもかかわらず有限なところにとどまり、無限なものを求める、矛盾した存在であることを述べられた。）

なぜ日常では円相を芸術だとは言わないのであろうか（禅芸術、宗教芸術という言葉は定着しているか。）（後記：定着していないと深野住職が言われた。）

後記：なお、今回の読書会では前回に引き続き、客観が（主観から独立に）存在するから  
どんどん収斂する、という意見が出た。これに関連し佐野先生が、人によって異なる主観  
的理性（自分が思っている理性）と客観的理性あるいは神性的理性（自分が分からない理  
性でストレートの神につながる理性）の区別を西田の「講義ノート」から示された。

客観（性）に関連して、自然科学の法則はある意味では客観的（妥当的）ではあるが、  
人間が考え出したものである点では主観的である（力学は以前はニュートン力学一辺倒で  
あったが今では量子力学などそれに代わるものがあり、これからも変わっていく可能性は  
ある）ことが述べられた。

これに関連し、体内時計が専門の生物学者の千葉先生が、美しい花を見るなどの臨死体  
験を神経科学的にいかにして生じるかを説明することはおそらくできるであろうが、しか  
しなぜ美しい花などを見るのかは説明できないと述べられた。

付記：コミュニケーションを容易にするための提案と読書会の目的の確認

私自身の表現に問題があった可能性があるのは否定できないが、こちらの意図が反対者  
に全く伝わっていなかったのは残念であった。また（時間上の問題を度外視すれば）西田  
芸術至上主義者否定論者たちが単に自らのテーゼを主張するだけでその根拠を何も示さな  
かったので議論の立場に立つことができず、残念であった。

昨年来思っていたことであるが、特に最近この読書会の参加者相互のコミュニケーショ  
ンがうまくいっていないのを感じる。その最大の原因は参加者全員に共通の土俵であるテ  
クストを無視し、もしくは個人の立場からテクストを都合よく読み込み、自分のテーゼを  
一方的に主張する態度にあると考える。意味が一義的に定まっていない抽象的な言葉を何  
の説明もなく使うがために論旨不明になるケースも見られ、ディスカッションのための訓  
練の不足を感じる。この点は反省すべきことではないであろうか。

現状ではこの「読書会」の機能は発足当初に比べ低下しているように思う。ここは何を  
する場なのかを、この際確認しておきたいと思う。

（後記：佐野先生が、この読書会の目的は教わるのではなく、自ら共に哲学することであ  
り、しかもテクストに即し、西田が考えたことではなく考えようとしたことを追うこと  
である、という、発足時に言われたことを確認された。しかし今回の読書会でも私の意図は  
まるで伝わっていないと一部の参加者から感じた。）